DAN JAPAN

レジャーダイバーを対象に
安全／医療情報・保険・緊急医療援助を提供し、
ダイビングの安全性を高めるDAN JAPANは
安全事業部により運営されています。

2018年冬号

Alert Diver Lite

CONTENTS

27 第19回 安全潜水を考える会　研究集会誌上レビュー

28 「スクーバダイビング事故の特徴と対策」
海上保安庁警備救難部救難課　海浜事故対策係長 明瀬哲也先生

29 「大学のダイビング実習における安全管理と安全学習」
東京海洋大学学術研究院教授　千足耕一先生

30 「病院到着前の適切な減圧障害管理について
IDANの新たな取り組み／ 2017年UHMS報告」
東京医科歯科大学医学部 附属病院高気圧治療部 草加市立病院　整形外科 新関祐美先生

31 事務局ニュース

32 イタリア・ウスティカ島レポート

34 DAN JAPANのご紹介

中扉写真：Marcello Di Francesco
イタリアダイブフェスティバル（イタリア・ウスティカ島）

お知らせ

会員様にステッカーの配布を開始します。

DAN JAPAN会員からの「緊急ホットラインの連絡先をすぐに確認したい」「海外DANの連絡先を知りたい」というご要望にお応えする形で、2018年1月に発送する会員カードからホットライン番号のステッカーを同封します。

ログブックや携帯電話などに貼り、万が一の事故に備えていただきたいと思います。台紙の裏面には、海外DANホットライン番号（Alert Diver Monthly PDF：P14参照）が印刷されていますので、台紙も大事に保管してください!

*電話番号などの情報は、実際に旅行に出発する前にDAN JAPANホームページで再度確認することをおすすめします。

*ステッカーは順次会員カードとともに送付しますが、ご希望の方にはDAN JAPANホームページでご購入いただけます（現在準備中）。

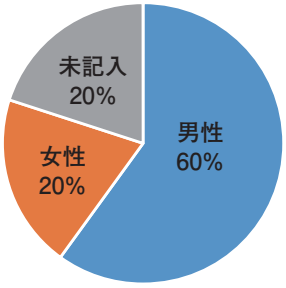
第19回 安全潜水を考える会 研究集会誌上レビュー

2017年11月18日（土）、東京海洋大学・越中島キャンパス 八十五周年会館で「第19回安全潜水を考える会　研究集会」を開催しました。当日は雨予報で肌寒い日でしたが、研究集会にはダイビング関係者103名の方にご参加いただき、大盛況でした。参加者のうち65名の方から会場でアンケートを回収しました。

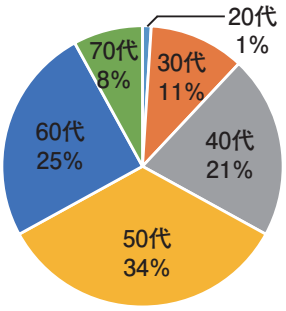
参加者の男女比は男性が60%、女性20%で、昨年と同様に男性が多い傾向にありました。年代別の比率は40代以上で88%を占めており、昨年の71%より大幅に増加しました。

年齢が高いダイバー層の安全意識が高く、安全に関する情報を求めていることがわかります。

[参加者男女比]



[年代別参加者]



Alert Diver Monthly

今回の誌上レビューは、各講演のダイジェスト版です。昨年同様、Web版「Alert Diver Monthly vol.10（2017年12月号）」および「vol.11（2018年2月号）」に詳細な内容を掲載しています。講演で使用したスライドや図を入れ、より深い内容となっていますので、是非ログインしてお読みください。なお、昨年の「安全潜水を考える会」も過去のAlert Diver Monthlyにてお読みいただけます。

東京海洋大学　ミニ情報

ハイブリッド型電池推進船「らいちょうN」

東京海洋大学が開発した電池推進船〈らいちょうN〉。これまでの電池推進船の研究成果を元に、2014年に進水しました。この船は、補助発電装置としてディーゼルエンジンを搭載しています。省力化、無人化を目的とした自動充電システムや、遠隔地からの運航管理、無人航行システムなどの開発も予定されています。

【主な仕様】●全長：14.0m●全幅：3.5m●出力45kW×2●速力（巡航）：8ノット●連続航行時間：3.5時間（EVモード）、約10時間（HEVモード）●蓄電池容量：145kWh

Report

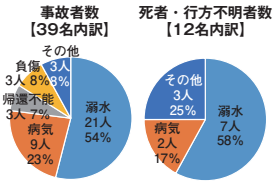
スクーバダイビング事故の特徴と対策

明瀬哲也氏

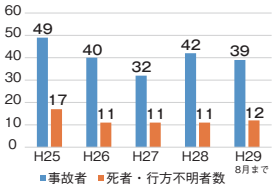
海上保安庁警備救難部救難課
海浜事故対策係長

2004年海上保安庁に入庁、2009年に潜水士を拝命、2011年より羽田特殊救難基地隊員、その後副隊長、隊長を歴任。2017年4月より現職。これまで現場最前線の救助活動に携わってきた経験を活かし、沿岸海域における水難救助体制の充実・強化、事故発生時における救助率向上に向けた取組み等に携わっている。

平成29年（1月～8月）事故内容別事故者数及び死者・行方不明者数（速報値）



事故発生数及び死者・行方不明者数の推移（過去5年間）



●平成29年事故データ速報値（1月～8月）

まずは、海上保安庁で認知している本年の1月から8月のスクーバダイビング事故速報値を分析し、今年の事故の特徴を報告します。

＊スクーバダイビングの事故者数は39名、うち死亡者／行方不明者12名。溺水・病気など事故内容別の割合に関しては例年と特に変わるところはありませんが、事故者数自体が昨年より大幅に増加しており、昨年1年間の事故者数と本年8月末現在の事故者数がほぼ同数となっています。

＊月別に事故者数を分析したところ、8月は15名、うち死亡者／行方不明者8名。これまで事故者数について、過去5年で10件／月を超えることはありませんでしたが、本年は8月単月で15件となり、さらに半分以上の方が死亡もしくは行方不明となっています。

＊事故全体数における60代以上の割合は36%となり、過去5年の21%より大幅に増加しています。40代、50代は約10%ずつ減少しています。

＊速報値であるため、原因不明の割合が多くなっていますが、自己過失と考えられる事故は全体の46%。

ダイバー自身が注意をしていたら防ぐことができた事故が約半数を占めます。

●安全潜水をするための3つの提言

提言①「普段からどう考えるべきか」

◆「自分の身は自分で守る」という意識を持つ

インストラクターに全てを任せきりにせず、ダイバー自身が「何が危険か」という知識と意識を持つことが大切です。

◆器材トラブルの際の対応を知る

器材には消耗する部品があり、定期的にチェックをしていても水中でトラブルが発生する場合があります。このため、トラブル発生時にどのように対応するか事前に考えて準備することが重要です。繰り返し練習しましょう。

◆体調管理も大事なスキル

自身の健康状態には普段から気をつけましょう。また、飲酒後のダイビングは事故者数の約半数が死亡しています。無理をせず、体調に異変を感じたらダイビングを中止するようにすることが大切です。

提言②「潜る前に何を準備すべきか」

◆事前の情報収集と打ち合わせが重要

水中ではコミュニケーションが取りづらくなります。このため、潜る前のブリーフィングや、事前に潮・海象などの状況を把握しておくことが重要になってきます。安全で楽しい潜水実施の9割は段取りで決まります。地形などの水中の状況を把握し、当該海域で発生する可能性の高い事故を想定して必要となる器材を準備して潜ることが大切でしょう。

また、水中ではありませんが、エキジットの際にスクリューに巻き込まれて負傷する、という事故も発生しています。操船者と実際に海面にいる方の意思疎通、または潜る前段階での取り決めがきちんと伝わっていなかったことが原因です。

提言③「冷静さを保つ」

◆事故を起こさないためには、プチパニックをいかに抑えるか、ということが重要です。抑えるためには事故を知り、自分はその対処をできるといった自信も必要です。

過去10年間の事故者約450名中、パニックによって事故に至った事例は145名。3割がパニックに起因した事故でした。経験年数が1年未満の方は、3分の1の57名。一方で、5年以上のベテランの方にも40名となっています。

パニックに対しては、どれほどイメージしても、トラブルが実際に起こったときには頭の中が真っ白になるケースが多々ありますので、プチパニックを抑え、冷静さを保ち、事故を未然に防ぐには以下の3つ全て揃わなくてはなりません。

・トラブル発生時の対処法を知っていること
・トラブル時の挙動を体験していること
・トラブル発生時の対処方法が身についていること

●安全な潜水とは何なのか

「安全な潜水」とは、自分の身に事故が起きたらどうするかということに意識をもち、その事故にしっかり向き合い、対処できるという安心感を抱くこと。さらに、自分だけでなく、仲間のことも安心させられる潜水をすることが、安全な潜水につながり、かつ全員で楽しむことができるのではないかと思っています。

大学のダイビング実習における安全管理と安全学習

私は、大学の体育の分野の教員をさせていただいています。スクーバダイビングは25年以上指導員をしていますが、大学では最近は素潜りやシュノーケリングを入口とし、その中の希望者にスクーバダイビングを指導しています。毎年、指導する中で海は大変厳しく、なかなか思った通りにはいかないということを、身をもって体感しています。このため、安全に実習を実施するために多くのことに気を配っています。安全教育において、参加者を危険から保護することは指導者の責務です。また、参加者自らが安全行動をとることができるよう指導者と相互協力することにより、活動の安全性が高まります。学習指導要領も学校安全について触れていますが、安全教育は安全学習と指導からなる、と記載されています。安全教育という文書の中では、知識理解のうえ危険を予測することにより、自らの判断基準と適切に行動できる態度や能力が養われるとも書かれています。芝山先生の調査では、潜水後の高所移動の知識が低下しているという報告があり、緩やかにですが減圧症の罹患率が上昇していることも指摘されています。このため、こういった知識に関する教育が必要であると結論しており、指導者である私たちも学ばなくてはならないと感じています。組織的な指導者の養成、ダイバーの技術の向上に資する認定基準のような仕組みも大切です。また、本会のようなセミナーや研究会を継続的に行い、安全教育、安全なダイビングについて考えてゆくことが重要であるとも指摘されています。

●SCUBA潜水直前の健康チェックについて

インストラクター・ガイドへの調査からは、アルコール、薬の影響に関する把握が十分ではなく、複数日のツアーでは健康チェックがおろそかになりがちで、事故情報がダイバーに浸透していないという問題点が抽出されました。対して、ダイバーへの意識調査からは、喫煙よりも飲酒の管理が甘く、潜水前のセルフチェックで休養を取るべきと考えられる回答をしているにもかかわらず、潜っている実態がありました。また、日常的な運動習慣がある方は50%、40代以上（特に男性）では、服薬習慣、血圧が高い、喫煙習慣率が高い傾向が認められました。

こうしたセルフチェックや健康状態の確認が重要と認識していても、現場では積極的な取り組みが現場で少ないように感じました。

そこで、大学生を対象とした授業で、血圧・体温測定を含むセルフチェックを実践してみました。潜る前にセルフチェック、その後指導者が確認してから潜るという試みです。その結果、10分程度の短時間で実施可能で、潜水前にダイバーが自身の健康状態を確認でき、さらに指導者も受講生の状態を確認できるという利点がありました。

●実習実施にあたって

実習を実施する際には、「BEACH」という頭文字での水に入る前の最終確認を行っています。

それぞれ頭文字の示す内容については、「B」はBuoyancyで、浮力。浮力体またはウエットスーツの着用やウエイト量の確認等です。「E」はEmergency Procedure、緊急時の手順、「A」はActivityで活動内容、「C」はConditionで活動場所のコンディション、「H」はHealthで参加者・指導者の健康状態です。これらを確認した後に水に入るように心がけています。

現地では、「BEACH」を含む様々な状況を確認するようにしています。例えば、天気予報や海況の確認および実施判断、指導者と受講者の適正人数比、陸上でのシミュレーション、健康チェックを含むBEACH確認、浮具やロープと補助者の活用、目印としての水泳キャップ利用、水中での受講者確認・状況判断、そして退水（健康）確認などを実施し、安全な講習を実施しています。

また、「安全管理」でも色々な方法があると思います。時間による管理、エリア制限による管理、グループに分けて活動を行う、適性人数比を遵守する、浮力体を使用したり用具の制限をしたりする、舟艇や陸上からの監視と支援を行うことも必要でしょう。さらには、一定の規準に沿って実施と中止を判断することも安全管理の一環だと思います。「安全教育・学習」でも同様に様々な方法があります。危険を周知・認識することも必要ですし、自ら健康チェックをしたり、気象情報を調べて発表したりすると、コンディションに積極的に目を向けるようになります。また、入水・退水を自身で申告することにより、安全に留意することを身に着けてもらうようにしています。これらの活動により、学生は主体性を高めて活動することができるようになります。また、ダイビングを「する/しない」、「どういった内容を実施するか」など、自己決定の機会を設け、さらに終了後にはふりかえりを活用すると安全教育・安全学習が促進されると思います。

千足耕一先生
東京海洋大学学術研究院教授

1966年4月神戸市生まれ。東京海洋大学海洋政策文化学科・教授。専門分野：海洋スポーツ、海洋性レクリエーション。1989年筑波大学体育専門学群卒、2003年学位取得（博士・医学：東邦大学）。日本海洋人間学会、日本野外教育学会、海に学ぶ体験活動協議会等の理事を務める。著書に「水辺の野外教育」（杏林書院）や「スキンダイビング・セーフティ」（成山堂）他。海上労働や海洋での身体活動に関する研究活動（論文執筆や科研費による調査活動）を継続的に実施しつつ、大学での教育活動を実施している。

Report

病院到着前の適切な減圧障害管理について IDANの新たな取り組み／2017年UHMS報告

新関祐美先生

東京医科歯科大学医学部附属病院高気圧治療部
草加市立病院　整形外科

医学博士、日本整形外科学会専門医、日本手外科学会手外科専門医。東京医科歯科大学学生時代に小笠原の海に魅せられてダイビングを始める。草加市立病院整形外科医長の業務の傍ら、東京医科歯科大学高気圧治療部非常勤講師として減圧症患者の治療にあたっている。

今年6月に米国高気圧潜水医学会であるUndersea & Hyperbaric Medical Society（UHMS）で、病院到着前の適切な減圧障害管理に関するプレコースが行われました。

●減圧障害患者に必要な病院到着前の管理とは

減圧障害では緊急な再圧治療が基本です。しかし、遠隔地にいるレジャーダイバーに理想的な対応は出来ません。遠隔地で減圧障害が発生した場合、様々な問題が生じます。

◆医療資源が限られる（潜水医学専門医不在、再圧施設無し）
◆現場でまず対応せざるを得なくなる
◆どういった場合に緊急搬送しないといけないのか

今の減圧障害ガイドラインは、米国海軍マニュアルに代表されますが、設備の整った病院での最適な治療を扱うものです。医療資源不足時にどうするかは述べられていません。

●IDANによるガイドライン作成の試み

IDANはホットラインサービスを通じて、世界中で減圧障害やその他の潜水事故者を支援しています。

2015年　にIDANは、Diving Injuries Management Committee（DIMC）を立ち上げました。目的は、設備の整った病院到着前の、減圧障害管理に関するガイドラインの作成です。メンバーは各DANから選出で、日本からは東京医科歯科大学の小島泰史先生が選出されています。DIMCは、ホットライン症例を検討し、臨床的な疑問点を抽出しました。例を示します。

◆遠隔地での減圧障害疑い症例に対して、症状所見の把握をどう行うべきか（特に医師がいない場合）。
◆常圧酸素投与を行っていったん症状は改善したけれども、また症状が悪化した。再び常圧酸素で対応していいのか。
◆軽症の減圧障害に対して緊急に再圧治療をする必要があるのか。

次にGuidelines Development Panel（GDP）という独立した有識者会議を任命し、先の疑問点の議論を委ねました。GDPでの議論がDIMCに答申されて、その後にガイドラインが作成される予定です。今回、GDPでの議論の一部がプレコースで公開されました。

●UHMS2017プレコース

プレコースは学会の前日に行われるセッションです。GDPメンバー6名が診断、応急手当、遠隔地におけるトリアージ、患者搬送、再圧治療が遅れた場合の影響等について講演しました。計7時間半、289枚のスライドを使用して発表されましたので全部をお伝えできませんが、いくつか紹介します。

【応急手当】

減圧障害では、浮上後6時間で9割前後が発症にもかかわらず、発症後6時間以内に治療を受けた人はわずか10%しかおらず、現場対応が非常に重要です。

◆常圧酸素投与

非常に大事です。Longphre（2007年）は、再圧治療を実施した2231例のレジャーダイバーの事故報告から、常圧酸素投与の有効性を報告しています。酸素投与で14%が症状消失し、51%が症状改善しました。また、再圧治療が1回で済んだ症例を多く認めました。しかし常圧酸素投与は十分に普及していません。応急手当に酸素投与を受けた減圧障害患者は20－40%程度に過ぎないとの報告が紹介されました。

◆酸素以外の補助療法

補液の重要性（経口補水液を与えることが望ましい。炭酸飲料・コーヒー・酒はダメ）、高体温は良くない（中枢神経系にダメージを与える）との報告がなされました。

【遠隔トリアージ】

減圧障害の重症度で対応は異なります。2004年のUHMSの軽症減圧障害に関するワークショップで定義されたmild（軽症）が考え方の基本となっています。

【再圧治療の遅れの影響】

治療開始時期が遅いほど、重症例ほど再圧治療の回数が多いことを過去の報告は示しており、治療が早いに越したことはないこと、しかし、重症例は6時間以内、軽症例は12から24時間ないしはそれ以上の待機が可能でしょう、治療が遅くなっても症状改善や完全治癒が得られる割合が結構あるので、遅くなっても再圧治療は考慮すべきとの提言でした。

●DAN酸素プロバイダーコース

減圧障害について、現場で一番大事なのは症状や徴候の認識です。酸素供給方法の手技を知っていても、どういうときに使用するか分からなければ無意味です。当コースはダイバーとして必要な知識が得られるいい機会です。皆さんには、まずは酸素供給法に習熟することが安全なダイビングにつながることを知っていただきたいです。

DANニュース

2018年、DAN JAPANは2つのイベントに出展します!

例年池袋サンシャインシティで開催される「マリンダイビングフェア」に出展してまいりましたが、今年はさらに「ダイビングフェスKANSAI」にも出展することとなりました。

ダイバーの皆様と直接お会いできることをスタッフ一同楽しみにしています。

当日は各会場それぞれにイベントを実施する予定としていますので、是非ブースまでお立ち寄りください!（詳細はDAN JAPANホームページ、「Alert Diver Mounthly」でご確認下さい。）

第26回 マリンダイビングフェア2018

日時：2018年4月6日（金）・7日（土）・8日（日）
場所：池袋サンシャインシティ
　　コンベンションセンター TOKYO
　　文化会館C（3F）、D（2F）ホール
公式HP：https://www.marinedivingfair.com/

ダイビングフェス KANSAI 2018

日時：2018年5月19日（土）・20日（日）
場所：大阪南港ATCホール
公式HP：https://divingfes.jp/

【ダイビングフェスKANSAIとは??】

西日本のダイビング、マリン関連業界の活性化のきっかけ作りを目的として、国内外含めたダイビングショップ・器材メーカー・ダイビング指導団体・旅行業界及び関連メディアなど、業界が一体となって開催される関西最大級のビッグイベントです。2017年5月、第1回が開催され多くの方が来場しました。

最新器材や水中映像機器の展示、各地ダイビングスポットの紹介や水中写真コンテストなど盛りだくさんの総合展示会です。

また、今回はマリンスポーツ&川、滝などの人気アクティビティスポーツの総合展示会（ブルーオーシャンフェスKANSAI2018）も同時開催され、さまざまな海の楽しみを知ることができるお得なイベントです。

目玉企画は、昨年好評だった巨大プールでの無料ダイビング体験、さらにはSUP体験も実施予定。水中写真家 鍵井靖章氏、戸村裕行氏のトークショーの他、日本の洞窟探検家 吉田勝次氏のトークショーも開催決定です!

西日本のダイバーの皆様、ぜひご来場下さい。

DIVING FES KANSAI 2018

左：巨大プールでのダイビング体験　右：会場で開催された安全セミナー風景（2017年開催ダイビングフェスタ2017より）

【Special Report】

イタリア・ウスティカ島レポート

2017年9月、イタリアのDANヨーロッパ本部で開催されたIDAN会議後、ゴールデン・トライデント賞授賞のためにウスティカ島を訪問しました。日本から訪れる機会の少ない場所への訪問となりますので、現地レポートをお送りします。

写真：Marcello Di Francesco

イタリアで最初に指定された海洋自然保護区

ウスティカ島は、イタリアの南部にあるレモンで有名なシチリア島の北、約70Kmに位置する面積約8km^{2}の小さな島です。火山性の島で、海底火山の爆発によって噴出した溶岩でできているため、海底は起伏に富み、魅力的な洞窟が数多く存在することで知られています。

周辺の海域はイタリアで最初に指定された海洋自然保護区（ウスティカ島海洋保護区：Area marina protetta Isola di Ustica）となっており、夏場には多くのダイバーが集まる有名な島です。2017年9月、日本からはほとんど訪れる機会のないウスティカ島に訪問しましたので、島の様子をレポートします。

上：IDAN代表とDANヨーロッパ全スタッフで記念撮影
左：IDANに授与されたトロフィーと金のバッチ、表彰状

ゴールデン・トライデント賞授賞式参加

2017年9月1日、DAN JAPANは水中科学・技術国際アカデミー（The International Academy of Underwater Sciences and Technique）「ダイビング界のノーベル賞」と呼ばれる「ゴールデン・トライデント賞」を授与されました。長年の研究活動、およびダイビングの安全普及の功績が認められ、全世界でIDANに名を連ねる全てのDAN(DANアメリカ、DANヨーロッパ、DANアジアパシフィック、DAN南部アフリカ、DAN JAPAN)が共同で授賞しました。

左：ウスティカ港全景。地形を生かした天然の港
上：DANヨーロッパキャンペーンカー。過去ヨーロッパ域内400か所を訪問している

イタリア ダイブフェスティバル The DAN Road Trip

ウスティカ島では、DANヨーロッパとPADIヨーロッパが「イタリア ダイブフェスティバル」を共催していました。日本の「ダイビングフェスティバル」のようなイベント会場ではなく、ボート発着所および島内施設を使用したイベントで、小規模ながらも器材メーカーや指導団体などがブースを出展し、多くのダイバーが立ち寄り器材モニターや施設の情報収集などしていました。複数のセミナーなども開催され、盛況なイベントでした。

DANヨーロッパは、「The DAN Road Trip」として、夏期にヨーロッパ各地で小規模なイベントを開催しています。「The DAN Road Trip」のメインの目的は「DANリサーチ（研究）」です。ダイビングプロフィールを収集し、ダイビング後の気泡の発生をドップラー検査機とエコーで確認して減圧症の研究を行っています。多くのダイバーからデータを収集し、より安全なダイビングが可能となるプロフィールを導きだす研究です。すでに、DANの研究データがダイビングコンピューターに反映されている機種もあり、今後のさらなる成果に期待が高まっています。

上：DANヨーロッパリサーチチーム。ドップラー検査器で心臓内の気泡の有無を調査
右：リサーチステーション。多くのダイバーが訪れ、データ収集に協力していた

左：IDANの代表がボートに集結。潜る事により互いの距離が近くなった
下：バラクーダの群れ。透明度が高く、遠くまで見通すことができた

ウスティカ島でのダイビング

前述のとおり、ウスティカ島は火山性の島で、ダイナミックな水中風景が非常に魅力的なダイブサイトです。
透明度は非常に高く、雄大な水中風景を存分に楽しむことができます。また、バラクーダの群れや大型のハタなど多様な生物が頻繁に現れ、にぎやかな水中でした。

ウスティカ島は日本ではほとんど知られていませんが、美しい海とおいしいシーフード、フレンドリーなダイバーの集う素晴らしい島でした。もし機会があれば訪問し、潜ってみてはいかがでしょうか。

DAN JAPANのご紹介

（一財）日本海洋レジャー安全・振興協会が運営する「DAN JAPAN」は、レジャースクーバダイビングの安全性の向上を目的として1992年1月にスタートした事業です。「DAN」とは「Divers Alert Network」の頭文字で、「Alert」は「注意を喚起する、注意を怠らない、機敏な」という意味があり、安全意識の高いダイバーのための全世界的なネットワークを構築しています。

医療サービス

ホットラインサービス（緊急対応）

ダイビングの後の体の異常など、ダイビングの緊急事態に電話でアドバイスとサポートをおこないます。

日本国内では救急搬送システムが整備されており、潜水事故の場合にもまず救急隊への連絡が最優先となります。しかし、ダイビングの事故は減圧障害など、一般的でない処置が必要な事象も多く発生するため、ダイバーに対し、重症化を防ぐ手立てなどの助言、再圧治療施設の紹介などの対応を24時間365日体制で実施しています。

メディカル・インフォメーションライン（非緊急時対応・医療相談）

ダイビングと健康に関する悩みや心配事に、潜水専門医による医療情報を提供しています。また、質問の内容によりDD NET医師を紹介する場合もあります。

受付は平日の9時～17時まで、メールや電話で回答しています。なお、医師による回答には通常1週間程度を要するため、減圧症の疑いがある場合にはホットラインでの対応となります。

DD NET（ダイバーズドクターネットワーク）

潜水医学に理解のある医師、あるいはご自身がダイバーである医師で構成されるボランティアネットワークです。ダイビングに起因するケガや症状の診察、ダイビング健康診断などが必要な際、実際に受診可能な医師の協力体制を構築しています。

現在、全国で約300名の医師にご協力いただいており、DANホームページにて最新情報を提供しています。

保険関連サービス

レジャーダイビング保険

DAN JAPANに入会すると、レジャーダイビング保険に自動的に加入となります。

この保険は「レジャーダイビング中に急激・偶然・外来の事故によって被った傷害」が補償対象となっており、国内または海外でのレジャーダイビング中のケガや事故に対応しています。

海外での治療費や救援費用は国内と比較して非常に高額になる傾向があります。そのため、現地の病院では治療や捜索を開始する前に保険の有無が確認されますが、意識のない時や行方不明時にはこの確認が困難となり治療や捜索の開始が遅れる可能性があります。そんな時でも、DAN JAPANのカードを事前に提示しておけば、保険加入の証明となり、スムーズな対応を受けることができます。

DAN業務中プラン保険（会員向け業務用傷害保険）

自動加入のレジャーダイビング保険では、業務中のケガは補償対象外となります。そのため、業務に従事するDAN会員のために、業務中のケガをカバーする傷害保険を提供しています（別途お申し込みが必要です）。

DANダイバープラス保険（傷害補償特約付団体総合生活補償保険）

国内外の「傷害死亡・後遺障害」「携行品損害」「キャンセル費用」などを補償するDAN会員向け保険です。スクーバダイビング中に限らず日常生活でも補償されます（別途お申し込みが必要です）。

ワールドワイドサポート

インターナショナルDAN（IDAN）のネットワークにより、DAN JAPANの会員は海外のダイビングリゾートで事故にあった時にもスムーズに救助、搬送、治療、医学的相談を受けることができます。

また、三井住友海上保険の緊急アシスタントサービスも付帯しており、海外からでも24時間365日、日本語受付で対応しています。

安全情報提供サービス

潜水事故緊急ハンドブック

入会時に、潜水事故に関する応急処置の方法や症状などを解説したハンドブックを配付しています。簡単な自己診断チャート、ダイビングに関連する安全対策、潜水事故に関する諸症状の対策、減圧症に対する応急処置、緊急時の連絡先等を1冊にまとめてあります。

各種講習会・セミナーと、報告書『潜水事故の分析』

年1回の安全潜水を考える会研究集会、複数地域で開催されるダイビング安全講習会など、ダイバーが直接最新の安全情報について学べる機会を提供しています。多様な講師から発信される、ふだん触れることのできない情報について直接聴講することができます。DAN会員は、参加費無料です。

また、毎年のダイビング事故についての報告書である『潜水事故の分析』を毎年発行、HPで販売しています。

会報誌「Alert Diver Monthly」

年10回発行。協会誌「海洋レジャー」発行月を除く毎月30日に発行される会員様限定のウェブマガジンです。潜水医学を基にした安全潜水の情報や、各国DANの調査および研究報告など、DAN会員の皆様にとって役に立つ情報を提供します。

DANWebサイト

会員専用ページ「My DAN」内にて、過去の『Alert Diver』の閲覧、海外のDANの記事の掲載、その他安全潜水関連の記事の提供をしています。また、DD NET、スポンサー、パートナーシップメンバー等の情報を一覧で閲覧できます。さらに会員登録変更や入会・更新もオンラインで24時間手続きが可能です。

トレーニング

DAN「潜水事故における酸素供給法」講習

ダイビング事故の際、減圧傷害を疑う事故者に対して、救急隊が来るまでの間、もしくは最寄りの治療施設への移送中に、医療用酸素を使用した応急手当を行うことを目的とした講習会を開催しています。ダイビング事故の被害を最小限に抑えるための酸素の特性や扱い方を理解・習得し、専門の知識とスキルを身につける講習です。